

定本上田敏全集

定本
上田敏全集
第二卷

みをつくし

みをつくし拾遺

父親

心

心拾遺

うづまき

編集委員

矢野 峰人
嘉治 隆一
島田 謹二
松村 緑
森 亮
安田 保雄
劍持 武彦
佐々木 満子

昭和五十四年 二月二十五日 發行

定本 上田 敏全集 第二卷

定價 一四〇〇〇圓

責任編集 上田 敏全集刊行會

(代表) 矢野 峰人

發行者 柴崎 芳夫

發行所 株式會社 教育出版センター

東京都墨田区北大塚三十一番十二
電話〇三一九「七」八九三〇(代)

限定五〇〇部の内

Ueda Bin Zensyū Kankōkai © 3390-0002-1475

上田敏全集 第二卷 目次

みをつくし

みをつくし拾遺

父親

心

心拾遺

うづまぎ

解説・編注

みをつくし

鐘樓（ガブリエレ・ダンヌンチオ）……………	五
艶女物語（ガブリエレ・ダンヌンチオ）……………	二
樂聲（ガブリエレ・ダンヌンチオ）……………	一九
まぼろし（ピエル・ロテイ）……………	三
屠牛（ピエル・ロテイ）……………	四
足弱車（ピエル・ロテイ）……………	四
文反古（ギイ・ドゥ・モオパッサン）……………	五
ゐろり火（ギイ・ドゥ・モオパッサン）……………	五
南露春宵（ニコライ・ゴゴル）……………	六
露西亞の大野（ニコライ・ゴゴル）……………	六
散文詩（イヴン・トゥルゲニエフ）……………	六

田舎世界	三
山靈	五
祈禱	七
老嫗	七
犬	八
わが敵	八
物乞	三
満足	四
處世法	四
戦はむ哉	五
たとへ草(ヨーハン ゴットフリード・ヘルデル)	七
あけぼの	七
眠	六
班鳩のはじめ	六
孤島(ペドロ・アントニオ・アラルコン)	二
四季賦(アイク・マアエル)	二六

みをつくし拾遺

春		二六
夏		二九
秋		二三
冬		二六
みじか夜		二九
よひやみ		三六
夏山遊		四三
夜のけはひ(ロバート・ルイ・ステイヴンソン)		五一
黒瞳(ペドロ・アントニオ・アラルコン)		五四
かたおもひ(ギイ・ドウ・モオパッサン)		七一
散文詩(イヴン・トゥルゲニエフ)		八一
一僧		八一
あすは、明日は、		八三

露西亞の言葉……………一八三

老女（マクシム・ゴルキイ）……………一八四

鷹の歌（マクシム・ゴルキイ）……………一九六

父親（アウグスト・ストリンドベルヒ）……………二〇五

心（レオニイド・アンドレイエフ）

心……………二六七

これはもと……………二五四

クサカ……………三八一

旅行……………三九三

心拾遺

恐怖（レオニイド・アンドレイエフ）……………四二一

沈黙……………四二

里子……………四六

第四賢人（カニンガム・グレアム）……………四七

俘（カニンガム・グレアム）……………四六

流行（ジョン・ゴルスワオシイ）……………四六

大事取（ジョン・ゴルスワオシイ）……………四三

秩序（ジョン・ゴルスワオシイ）……………四九

うづまき……………四七

解説……………島田謹二 五九

編注……………劍持武彦 三九

み
を
つ
く
し

池のほとりの庵の藤に
P. R. B. の風雅、語らひし
日をおもひて、この書を
わが友禿木平田氏に獻ず。
不忍のあに忍ばざらめや。

はしがき

海のあなた、佛、伊、獨、露、米、西の藝苑に、ちかき世の逸品と仰がるゝ短篇十數種、こゝになつかしきわが倭の言葉に和らぐ。抑も近代の文字、彩ゆたかに調も繁げく、あるは、幽かなるにほひに、琴笛のね、しみぐと覺ゆるもの多かり。人情のきはみを盡し、世姿のまことを寫して、たけ高く、いたりも深きこれらの妙文を移さむとすれば、いきほひ、古言を復活し、新語を創作して、聲調の起伏、餘韻の搖曳に考へ、舊態の様式を離れざるべからず。されば、人よ、ひとへに晦澁の譏を以て、この書に擬するに先ち、少しく原文の深邃に思あたらせたまへ。澎湃たる近代の思潮、きばやく、輕びやかに解しうべけむや。

卷のをはりの二篇はみづからの文なり。六樹園が「都の手振」に窺ふべき言の葉の巧にあらず、前世紀佛蘭西一抒情詩人の「夜の歌」に現はれたる心にもあらず、たゞ、かりそめのそごろ言、伶人のいはゆるふあ。ん。た。じ。や、あるは、繪だくみのえ。ち。う。ど。なるべし。

明治卅四年十二月

東京 上 田 敏

鐘 樓

やよひになりて、ピアシェは戀の熱に燃えたり。まどろみもなき二夜三夜は、總身にたとしへなき歡び漲り、千萬の木芽、肌をついて、つのぐみわたるやうに、あやしの屋根うらのすまゐよりも、物とはなしに、妙香のぼりきて、巴旦杏の花ざかりにも似たりや。

バルバラ上人もみそなはせ。始めてゾルフィナを見てしとき、をとめは巴旦杏のしづ枝にゐよりて、海のかた、眞帆あげて走る船をながめ、日にうなづける白ばなのかざしゆかしく、麻の花盛につまれ、眼ざしのうるはしさ葉鶏頭の如くなるに、心もまた花にみちけらし。

春の光を帶びたるこの幻は、ピアシェがすさまじき獨寢の手枕に通ひぬ。かくてアドリアの海の磯かけて、東雲はやもあけゆけば、かれは起きあがりて、鐘樓の軒、海燕の巢ふあたりにのぼりぬ。

空はそこはかとなく、おぼつかなき吐息のやうなる音にみちて、若葉のさゝやきのやうに、わか枝の

そよぎのやうに、鳥の羽ばたきのやうなり。低き家は、まだねむりのうちなれど、半めざめたる牧場は、朝霧のとばりのはしより透きて、静けき湖のほとりの木立、そよかぜに點頭づき、灰色のそらに遠山は淡くみえがくれつ、前なる海は影くろき船を浮べて、はがねの帶の如くふるへ、すべての上には、清くすみたる蒼空の靜平ありて、星はひとつひとつ消えゆかむとす。

腰に精妙の彫ある、青銅の三鯨鐘は、朝の心に勝鬃の調送らばやと、ピアシェの手を待ちたり。ピアシェは綱をとりぬ。はじめのひとふりに、巨鐘ラ・ルウヴは、息深き鯨音洩し出で、前後の動搖に、金聲の波をうたし、薨に傳ひ、風にのり、野づらを横に、磯濱あたり、音はます／＼ひろがりぬ。このとき青銅は、戀に暴びたる狂亂の巨人の如く、口を海づらに開きて、左右にふるへ、遠長きつぶやきに消ゆる大音のふしつくるや、聴て清明の序破急に變り、おほぞらに放れゆく搖曳の響すゞやかなり。塔のしたには音聲の波、春光のそれと合し、遠里はるかに日影をおひゆけば、烟の如くこめたる朝のもやも、曙の榮にとけて黄金の色を染め、連山さながら磨きたる銅の姿なり。

忽にして、清亮の聲はつぶやける沈靜のうちに破れぬ。若鹿の情極れる叫の如く、ラ・ストリイジの鐘樂は鋭し。續ては、またラ・シャントウウスの急聲、華やかに澄みて、玻璃圓閣の上に霞たばしと聞くとき、遙に山々の鐘はつき出でぬ。十寺十五寺の金口、青野に響くは朝のにはひの歡びの歌を田のものに捧ぐるにあらずや。

鐘の響はピアシェを醉心地にす。綱をとりてましらの如く、宙にかゝりて、ラ・ルウヴの力にふられ、

高きにのぼりて、ラ・シャントゥウスの餘響を捉へむとするに、額の大痍は、赤み來りぬ。かれはこの高きやの王なり。鳶の葉しげき舊墟の壁には、生ある手足の如き蔓ひろがり、きらびやかなる綠葉は赤きわりかはら磚をつゝみて、螺鈿の貝の如く、くちなはめいたるしのぶ草も、軒端の鳥の巢を襲ひつれど、そこには、はやくも、戀わたる燕のかたらひしげし。

村人は皆ピアシエを愚なりといふ。されどこの高塔に於て、かれは君王なり、詩人なり。蒼穹この花多き地を蓋ひて低きとき、アドリアの海の、日の下に輝くとき、衝はなりはひにいそしむ時、かれは隼鷹の如く鐘樓の欄に倚り、或夜過つて額を破りたるラ・ルウヴの鐘に耳よせつゝ、をりをり眩あてゝ搖曳する美音を樂みぬ。傍のラ・シャントゥウスは唐草の金具におきたる珠玉の如く、聖アントニオの浮彫もまばゆきばかり、又少しはなれて、腰に傷ある舊鐘ラ・ストリイジは、ものうげに口ひらきたり。

噫鯨鐘三個。幻は生まれぬ、夢のすさびはおひぬ、縹緲たるなさけの歌物語は起りぬ。ゾルフィナの姿よ、いかに樂いかな。曙のにはふとき、美音の海にうかびて、あるは黄昏のそら、ラ・ルウヴのおと、うらがなしく、うれしき衰へに鐘樂のきえゆく時。

卯月その日、二人はラ・モノオンデルのうしろの原、胡桃の大樹の陰に會しぬ。そらは、こゝかしこ、入日の紫の影に染みて、猫眼石の色を帯びたり。むすめは牛の飼ぐさを刈りつゝ歌ひぬ。十月新酒の香の如く、春のにほひ、頭にのぼりて、めくらまむとす。頸をのべて、うつむけば、若草肌にふれて、撫でいだくが如く、快よさに、眼は、半、とぢたり。